

1. マンハッタン関数  $d: \mathbb{R}^n \times \mathbb{R}^n \rightarrow \mathbb{R}$  を

$$d(\mathbf{x}, \mathbf{y}) = \sum_{i=1}^n |x_i - y_i| \quad (\mathbf{x} = (x_1, \dots, x_n), \mathbf{y} = (y_1, \dots, y_n))$$

と定義する. このとき  $(\mathbb{R}^n, d)$  が距離空間となることを証明せよ. (つまり講義中に行った証明をもう一度自分の手で書き,  $d$  が  $\mathbb{R}^n$  上の距離関数であることを示してください.)

(解答例)

(1) マンハッタン距離関数の定義から, 任意の  $\mathbf{x}, \mathbf{y} \in \mathbb{R}^2$  に対して

$$d(\mathbf{x}, \mathbf{y}) = \sum_{i=1}^n |x_i - y_i| \geq 0$$

が従う. さらに上記式より  $d(\mathbf{x}, \mathbf{y}) = 0$  であることと全ての  $i$  ( $1 \leq i \leq n$ ) について  $x_i = y_i$  であることは同値, すなわち  $\mathbf{x} = \mathbf{y}$  であることは同値である.

(2) マンハッタン距離関数の定義から, 任意の  $\mathbf{x}, \mathbf{y} \in \mathbb{R}^2$  に対して

$$d(\mathbf{x}, \mathbf{y}) = \sum_{i=1}^n |x_i - y_i| = \sum_{i=1}^n |y_i - x_i| = d(\mathbf{y}, \mathbf{x})$$

が成り立つ.

(3) 任意の  $\mathbf{x}, \mathbf{y}, \mathbf{z} \in \mathbb{R}^2$  に対して

$$\begin{aligned} d(\mathbf{x}, \mathbf{z}) &= \sum_{i=1}^n |x_i - z_i| \\ &= \sum_{i=1}^n |x_i - y_i + y_i - z_i| \\ &\leq \sum_{i=1}^n |x_i - y_i| + \sum_{i=1}^n |y_i - z_i| \\ &= d(\mathbf{x}, \mathbf{y}) + d(\mathbf{y}, \mathbf{z}) \end{aligned}$$

が成り立つ.

以上より  $(\mathbb{R}^n, d)$  は距離空間である. □

2. 次のように定められた関数  $d$  は全て  $\mathbb{R}^2$  上の距離関数ではない. それぞれの  $d$  について反例を挙げよ. ただし,  $\mathbf{x} = (x_1, x_2), \mathbf{y} = (y_1, y_2) \in \mathbb{R}^2$  とする.

(a)  $d(\mathbf{x}, \mathbf{y}) = \sqrt{(x_1 - y_1)^2 + (x_2 - y_2)^2} - 1.$

(解答例)

$\mathbf{x} = (0, 0), \mathbf{y} = (0, 0)$  が反例. 実際

$$d(\mathbf{x}, \mathbf{y}) = \sqrt{0^2 + 0^2} - 1 = -1 < 0$$

である.

(b)  $d(\mathbf{x}, \mathbf{y}) = |x_1^2 - y_1^2| + |x_2^2 - y_2^2|.$

(解答例)

$\mathbf{x} = (1, 0), \mathbf{y} = (-1, 0)$  が反例. 実際,  $\mathbf{x} \neq \mathbf{y}$  であるが

$$d(\mathbf{x}, \mathbf{y}) = |1^2 - (-1)^2| + |0^2 - 0^2| = 0$$

である.

$$(c) d(\mathbf{x}, \mathbf{y}) = \sqrt{(2x_1 - y_1)^2 + (2x_2 - y_2)^2}.$$

(解答例)

$\mathbf{x} = (0, 0), \mathbf{y} = (1, 0)$  が反例. 実際

$$d(\mathbf{x}, \mathbf{y}) = \sqrt{(0 - 1)^2 + (0 - 0)^2} = 1$$

$$d(\mathbf{y}, \mathbf{x}) = \sqrt{(2 - 0)^2 + (0 - 0)^2} = 2$$

となって  $d(\mathbf{x}, \mathbf{y}) \neq d(\mathbf{y}, \mathbf{x})$  である.

$$(d) d(\mathbf{x}, \mathbf{y}) = (x_1 - y_1)^2 + (x_2 - y_2)^2.$$

(解答例)

$\mathbf{x} = (0, 0), \mathbf{y} = (1, 0), \mathbf{z} = (2, 1)$  が反例. 実際

$$d(\mathbf{x}, \mathbf{z}) = (0 - 2)^2 + (0 - 1)^2 = 5$$

$$d(\mathbf{x}, \mathbf{y}) = (0 - 1)^2 + (0 - 0)^2 = 1$$

$$d(\mathbf{y}, \mathbf{z}) = (1 - 2)^2 + (0 - 1)^2 = 2$$

なので三角不等式  $d(\mathbf{x}, \mathbf{z}) \leq d(\mathbf{x}, \mathbf{y}) + d(\mathbf{y}, \mathbf{z})$  を満たしていない.

3. 区間  $I = [0, 1]$  上の実数値連続関数全体の集合を  $C(I)$  で表す. このとき関数  $d: C(I) \times C(I) \rightarrow \mathbb{R}$  を

$$d(f, g) = \int_0^1 |f(x) - g(x)| dx$$

と定める. このとき  $d$  は  $C(I)$  上の距離関数であることを証明せよ (したがってこのとき  $(C(I), d)$  は距離空間となる).

(解答例)

(1) 任意の  $f, g \in C(I)$  に対して  $d(f, g) \geq 0$  であることを示す. 全ての  $x \in I$  に対して  $|f(x) - g(x)| \geq 0$  であるから

$$d(f, g) = \int_0^1 |f(x) - g(x)| dx \geq \int_0^1 0 dx = 0$$

となって示された. また, 上記式より  $d(f, g) = 0$  であることと  $f = g$  であることは同値である.

(2) 任意の  $f, g \in C(I)$  に対して  $d(f, g) = d(g, f)$  であることは

$$d(f, g) = \int_0^1 |f(x) - g(x)| dx = \int_0^1 |g(x) - f(x)| dx = d(g, f)$$

より従う.

(3) 任意の  $f, g, h \in C(I)$  に対して

$$\begin{aligned} d(f, h) &= \int_0^1 |f(x) - h(x)| dx \\ &= \int_0^1 |f(x) - g(x) + g(x) - h(x)| dx \\ &\leq \int_0^1 |f(x) - g(x)| dx + \int_0^1 |g(x) - h(x)| dx \\ &= d(f, g) + d(g, h) \end{aligned}$$

であるから三角不等式が成り立つ.

以上より,  $d$  は  $C(I)$  上の距離関数である.